

中近世和泉国の三昧聖と寺院

—長滝墓地を中心に—

細川 涼一

論文要旨

- 一 中近世の三昧聖と和泉国惣墓の研究史
- 二 近世の長滝墓地と極楽寺
- 三 公慶の大仏再興勸進と三昧聖

- 四 中世末期日根荘の三昧聖
檀波羅蜜寺と安楽寺三昧・
禪興寺と長滝墓地—中世寺院と墓地の関係

行基（東大寺）系三昧聖については、上別府茂氏の研究を一つの到達点とする研究史の流れがあり、和泉国でこの三昧聖が管理した惣墓や葬式寺院の分布をめぐっては、三浦圭一氏の研究がある。本稿では、これらの研究史を前提として、和泉国の三昧聖と寺院の関係を、泉州下組の長滝墓地（極楽寺三昧）を中心として考えてみた。

近世末期の『泉州下組庵室三昧明細帳』によれば、長滝墓地は極楽寺の墓寺号を有し、極楽寺の三昧聖周道は泉州下組の聖惣代を勤めていた。この長滝墓地は、近年の発掘調査の成果や、現存する石造遺物から、室町時代にまで遡る惣墓であることが確認できる。この長滝極楽寺三昧の事例では、文献で室町時代の三昧聖の存在形態を明らかにすることは困難であるが、『政基公旅引付』・「九条家文書」から、近世に極楽寺と同じく泉州下組に属した土丸一心寺三昧・安松妙蓮寺三昧・佐野安楽寺三昧の三昧聖の存在を明らかにす

ることができる。それによると、彼らは田の一反も作らず、葬送を「当道之職」として專業化し、守護と荘園領主の敵味方の当事者関係から無縁であることを標榜していた。ただし、実際には作人として把握される三昧聖もいた。これらの三昧聖が定住する墓寺が室町時代に成立したのは、佐野安楽寺が檀波羅蜜寺の奥院・子院であり、長滝極楽寺が禪興寺の奥院・子院であったのが、室町時代にこれらの地域寺院（律宗寺院が多い）から、地域住民の葬送を專業化をして請負う墓寺として分化自立したことによると考えられるのである。

このような墓寺に定住する三昧聖が行基による墓地開創伝承を伝えたのは、近世初期に東大寺大勸進公慶が勸進所として建てた龍松院によつてこれらの三昧聖が把握されたからであるが、それ以前の室町時代に東大寺大勸進職であった戒壇院（律宗）と三昧聖がすでに関係を持っていた可能性もある。